

## 第2回兵庫県公立大学法人評価委員会 議事録

### 1 会議の日時及び場所

- (1) 日時 平成25年4月19日(金) 15:00~17:00
- (2) 場所 兵庫県公館 第2会議室

### 2 出席した委員

石川委員長、瀬川委員、西川委員、藤田委員

### 3 出席した職員

(兵庫県)

平野知事公室長、片山管理局長兼大学参事、戸田大学課長、小野大学課副課長  
(公立大学法人兵庫県立大学)  
藤原理事兼事務局長、藤森事務局副局長兼経営企画部長

### 4 会議の内容

- (1) 開会
- (2) 挨拶
- (3) 出席者紹介
- (4) 議事

公立大学法人制度の概要について  
事務局より資料1について説明後、意見交換を行った。  
(下記5参照)

公立大学法人兵庫県立大学中期目標(案)について  
事務局より資料2について説明後、意見交換を行い、概ね了解を得た。  
(下記5参照)

今後のスケジュール  
事務局より資料3により説明。

- (5) 閉会

### 5 意見交換の概要( :委員、 :法人又は事務局)

[公立大学法人制度の概要について]

中期目標の期間6年間は規定で定められており、遵守する必要があるが、リーマンショック等に見られるよう、環境の急速な変化に対応すべく企業等の中期計画は概ね3年間程度で立案されている。教育の現場においても、3年間程度で見直しを行わないと、実状に即した目標にならないことが危惧され、ぜひ見直し制度を規定に盛り込んで欲しい。

法人の定款の中で、4年以内に見直しを行うことを規定しており、3年経過後には、十分見直しをしていきたい。

住民に対して提供するサービスの項目内容は、県立大学が、何のために存在しているのか、県や地域住民が何を期待しているのかに関わる。教育や研究は、県内だけでなく、日本中や世界中を視野に入れていくべきである。

住民については、国民あるいはサービスを受ける者全てに対してという意味で、さらに広く解釈する必要があると考えている。今まで県立大学が行ってきた業務をこの住民に対して提供するサービスに該当すると解釈している。

法人に移行し、管理的な業務が増えてくるが、今後は、毎年の業務実績の評価が必要になってくる。評価の方法については、重点的に項目を決めるなど、仕組みについて法律の中で考えられる余地がないか検討する必要がある。

法人化の仕組みだけでなく、学位認証評価など従前から様々な評価制度があり、評価疲れのような状況に陥っているのではないかという話が出ている。今回の法人化の制度では、6年1回、見直し時の3年1回の他に、年度評価が入ってくるため、具体的な評価方法については、法律の許す範囲内において、県側とも協議をし、今後提案させていただきたい。

県側としても、評価方法については、大学との連絡協議会等の中で検討していく。

今までは、非常に網羅的な項目を設定し、それに対する自己評価を行い、そのまとめたものをこの評価委員会において評価を行っていたが、労力的にも時間的にも難しいため、法人と県とで綿密に協議を行っていただき、簡潔なものを検討いただきたい。

教職員の身分について、職員は県が派遣することとなっているが、法人化のメリットとしては、職員を大学運営のエキスパートにすることだと感じるが、今後も県立大学の場合は、定期的にローテーションを行う予定なのか。

教員は法人の教員となり非公務員になるが、職員については、当分の間、3年～5年の任期で、法律に基づいて派遣し、ローテーションを行う。中期目標の見直しの時期には、この方法についても検討していく。

[ 公立大学法人兵庫県立大学中期目標案について ]

県が策定し、法人に示す中期目標は、基本的な目標とするべきである。法人化し、自律性を持たせ具体的内容は法人が決定し、それを県がサポートするという体制になると考えるので、具体的項目が入りすぎると従来とあまり変わらないように感じる。中期目標が、具体的なものまで踏み込むと、自律性を損なうことになる。

今後、両括弧の項目を骨子として、文章を肉付けしていき、最終的な目標案を作りたいと考えている。今回は、この骨格部分について、示しており、イメージを持っていただくために、具体例として並べている。

中期目標の策定課程に、大学から意見を申し出る機会がある。県と法人とで、常にすり合わせを行い、法人側としても、今後やっていきたいことを県に示しながら、それらを踏まえて中期目標案の項目を一緒になって考えてきている。具体的な内容については、中期計画になる部分も含んでおり、イメージを持っていただくために、今回の資料の形にさせていただいた。

昨年度の評価委員会での発言を、大幅に採用して頂いていることに感謝します。

[ 教育に関する目標 ] でグローバル人材の育成に関して、留学生の派遣受入体制の整備についての記述があるが、現状の海外からの留学生の受入は、中国に偏重している。もちろんアジア圏での最大の貿易相手国であり、当然ではあるが、今後の成長が見込まれるアジアの新興国、世界の新興国にも幅広く目を向けるべきである。留学生の受入に関しては、地域別、国別にある程度の収容枠を設けるなどして、留学生側からだけの一方的な受入配分ではなく、受け入れ側から見て国別にバランスの取れた仕組みを検討して欲しい。そうすることで将来、海外との新たな人脈も生まれてくる。

[ ひょうごの強みを活かした特色のある教育の展開 ] では県立大学という地域性を配慮したと思われるが、第1項目にコウノトリ、山陰海岸ジオパークが記載されているが、大学としての研究、世界に向けての研究をアピールするには、Spring-8、SACLA、京などの先端研究基盤を第1項目に持ってくるほうが、兵庫県立大学をPRできるのではないかと。最後に兵庫県立大学が優秀な学生を確保していくには、ブランドづくり、すなわちそのブランドを見れば、兵庫県立大学を思い出すブランディングが必須である。従来は3校がそれぞれ進めてきたブランドイメージを活かしつつ、3校を統合したブランドを早急かつ、広く定着させることが必要であるが、現在進めている戦略に関して教えて欲しい。

地域の内容と最先端の研究の並びの部分については、ご指摘があったように、国際的なレベルを前に出してから、地域をその次に出すように、優先順位について対応する。どちらも重要な項目であり、両立していくべきものであると考えている。

現在、アジア諸国からの留学生数の拡大を検討しており、中国だけでなく、ミャンマーやベトナムなどを視野に入れ、協定を締結している大学との学生や教員の相互交流を行うなど、戦略的な国際交流を視野に入れて進めていくことを議論している。

大学のブランディングについては、旧3大学の伝統の強みをどう伸ばしていくかという視点で、各部局の特色化戦略に重点を置いて、中期計画をまとめていく予定である。4月からは、副理事長をトップにおいた広報戦略推進本部を立ち上げ、副理事長がマスコミを訪問するなど、戦略的に広報を行っているところである。

中期目標案については、この骨子をベースにして形になっていくことで問題はない。戦略的広報については、県立大学の特色は何かということを出す必要があるが、どこに重点を持っていくのかが重要になってくる。また、戦略的に進めていくためには、専門家などの活用を今後検討してはどうか。

将来的には、学内取材も行うような専門家を雇用したいと考えている。今年度は、法人化1年目であるため、学内の広報予算をかき集め、専門業者を集めてコンペを実施するなどの工夫を行った。決定した提案内容は、「トライアングル」であり、トライは、公立大学法人スタートの年として、トライする大学、大学自体もトライし、学生に対してもトライをよびかける大学、アングルは、教育・研究・社会貢献の三角形をコンセプトとしている。そのコンセプトに基づいてあらゆる媒体で打ち出し、スタートを切ったばかりである。プロの考え方をできるだけ取り入れた広報戦略を少しずつ進めていきたいと考えている。

高校生が、大学に最初に接触するのは、大学のHPである。1年前の記事が載っているようなHPでは誰も見ない。新聞記事で取り上げられたことは、すぐにHPにアップをするなどの努力が大切である。大学にとっての1番の財産は、卒業生であるため、周年事業等の大きなイベントを一種のお祭りで終わらせず、それを契機とした同窓会組織の再構成が重要になる。